

詩 と 政 治

三月革命の詩人 ゲオルク・ヘルヴェーク

中 野 和 朗

1

「脱イデオロギー」なるものが推進され、それ自体いかにイデオロギー的であるかには目をつむってなされる「イデオロギー」攻撃が、ますます臆面もなくつづいていくかに思われるこのご時世に、「詩と政治」などというきわどいテーマを扱うことは、決して穏当なこととはいえないし、また利口なやり方ともいえない。「イデオロギー」ということばを耳にただけで鳥肌をたてたり目玉を剝いたりするような人間がいるからには、このことばにはよほど特殊で異様な意味あいがかめられているのにちがいない。たとえば「ベスト」ということばのもついまわしいひびきが。そしてそれはどうやら社会的政治的用語を用いると「左翼」、あるいはもっと通俗的には「アカ」ということばの同義語として用いられているからだということが判る。だとすると「イデオロギー」ということばをきいて眉間に寄せられる皺のもつ意味はもはや歴然としてくる。しかしこのイデオロギーというのはなにも「左翼」の専売品ではなく、たとえば、軍国主義のイデオロギー、ファシズムのイデオロギー、天皇制のイデオロギー、右翼のイデオロギー、ナチスのイデオロギーなどとはなはだ融通性のあるものなのだ。とくに学問研究においては「イデオロギー抜き」などということは、「ヘソのない人間」を考えるのと同じ程度に滑稽なことだ。

イデオロギー嫌いが剝きだす目玉や、額によせる皺は、いささかも非イデオロギー的であることとか、イデオロギー的中立性だとか、客観的立場だとかを証拠だてる役にはたたないのであって、むしろそれが「反権力的なイデオロギー」などと限定づきでなされる場合には、もはや、目玉や皺の一本一本が、よしんば思いもかけないことであろうとも、まさに特定のイデオロギーそのものの見事な表現なのである。

2

「詩と政治」という問題のたてかたのきわどさは、「文学と社会」あるいは「詩と思想」などと言いまわしをかえてみたところでもかわりがない。「詩は詩であって政治ではない」「政治は政治であって詩ではない」という主張は決して間違っていない。まさにその通りである。

ところで、トーマス・マンは「芸術家と社会」という講演の中でこんなことを語っている。「社会批評家としての芸術家なるものは疑いもなく政治に首を突っこんだ芸術家である。」更に「政治についていえば、ゲーテもまた、かれが芸術家に対して政治を警戒せよといかに忠告しようとも、切り離すことのできぬものは切離すことはとうていできなかったし、芸術と政治、精神と政治の間に必然的に存在している結合を止揚することは露ほども出来なかったのである。」⁽¹⁾

文学と政治は断乎として同一物ではない。しかしまた文学と政治は断乎として切離すことができないものである。

にもかかわらず文学と政治を切り離す主張、即ち「芸術のための芸術」とか「文学の自律性」といった見解は、くりかえしくりかえしさまざまに形をかえて現われている。しかしどんなに文学の非政治性、非イデオロギー性を主張してみたところで、その主張自体すでに特定の政治的立場、特定のイデオロギーの主張になってしまう。その主張はつまるところ非革新、体制的、保守的あるいは反動的イデオログとして、これまで政治的にいかに大きな役割を果たしてきたかあらためて強調するまでもあるまい。

そもそも、古今東西をとわず歴史の中で文学が、詩人や作家が、一度でも非政治的であったためしがあるだろうか？ 人間は社会的な存在であって、社会は形態こそちがえ政治のメカニズムの中で機能しているという明白な真実を認める限り、そのような例を探し出すことは不可能である。

従来の文学史において、傾向文学とか政治的文学あるいは時事詩、政治詩とよばれてきたものは何であったか？ 程度の差こそあれ、それらには特徴的な共通点がある。それはときとして赤く燃える怒りとなり、激となり、痛憤となり、呪いとなり、またきわめてまれにはよろこびとなって表わされたが、いずれにせよそこにあるのは、人間解放への限りない希求であり、支配者・圧制者に対する反抗である。その上そこには感動的なヒューマニズムの精神が脈々と底流となって流れているのである。

「政治的・傾向的文学(詩)」という呼称は、このような文学(詩)の代名詞となってきた。

ところで、それ以外の文学はどうなのか？ むきだしのものから、その素顔を幾重もの仮面で隠したものも含めて、政治性と対置させられた芸術性という基準で評価された文学はどうなのか？ 好むと好まざるとにかかわらず、はたまた意識されていようといまいと、結果的にはすべて支配者の提灯持ちに墮してきた文学はどうなのか？ いったい誰がこれを政治的・傾向的でないなどということができるのか？

ここで再度はっきりと確認しておこう。文学から政治を切り離すことはできない。文学から政治を切り離そうと試みるやいなや、そこにたちどころに政治性が現われるのだ。あらゆる文学は政治的である。非政治的(あるいは非イデオロギー的)文学の存在は、もはや神話でしかない。すべての文学は、基本的にはふたつのあり方、観念論的であるか唯物論的であるか、形而上学的であるか弁証法的であるか、保守的であるか革新的であるか、のいずれかである。人類の前史としてのわれわれの時代、われわれの社会は、階級対立の社会である。したがって、さらに適確にいいなおせば次のようになる。

あらゆる文学は、基本的にはブルジョアジーの立場にたつかプロレタリアートの立場にたつかいずれかである。

これまでくりかえし「文学とは何か」が問われてきた。これにたいして実にさまざまな人間がさまざまに答えてきたが、最近では、これが「文学はいまやどんな存在意味をもつのか？ 文学は、もはや無用の長物ではないか？」という憂慮の形で述べられる。しかしこの憂慮には、文学の有用性が前提とされていることがとりあえず重要なのである。なぜなら、文学の有用性だの功利性についてはいぜんとして偏見にみちた、あるいは無知からの否定的内々は懐疑的な見解が根強くあるからだ。文学の有用性などを問題にすると、「神聖な」文学が冒瀆されたと額に青筋をたてる者さえいる。だがその青筋こそは、文学の有用性とはとり

もなおさず文学と政治の関わりのことだということを先刻承知しているということの表現ではないか。

小説にせよ詩にせよ戯曲はなおさらのこと、いったん享受されるや否や、享受者の内部でアルコールの様に目には見えないが絶大な作用を発揮する。善い文学は善い作用を、悪い文学は悪い作用を及ぼすが、とにかくこの作用こそ文学の有用性の鍵である。こう考えると文学はこわいものだ。

圧制の支配に抗し、自由を、人間の解放を詠った文学が、支配者から受けたあの迫害は何を意味するか？ ハイネや小林多喜二を考えてもみよ！ 支配者こそまさに文学のこわさを、文学がするどい刃をもつ武器であることを誰よりもよく理解していたのではないだろうか。かれらは、文学の有用性にたいしてみじんの疑いももたなかった。だからかれらは、常に文学を警戒し、弾圧し、そしてかれらの文学を必要とした。かれらの文学、それは甘いオブラートに包まれた麻薬である。それは、国民大衆の正常な感覚と健全な精神を犯すために、いかに強力な効果をあげてき、そしていまもあげていることか。従来の文学史、ブルジョア文学史は、このようなかれらの文学の旗手たちの虚像で埋めつくされている。

今日われわれは、たとえば大江健三郎や小田実、中野重治が、文学においても、また実践行動においても、いかに政治的でイデオロギー的であるかをよく識っている。ところで、ノーベル文学賞作家川端康成はどうなのか？ グロテスクな死で危険な茶番を演じた三島由紀夫はどうなのか？ 助平坊主の今東光は？ 病的変節者林房夫は？ かれらはいったい非政治的、非イデオロギー的だなどと誰がいうことができるのか？ かれらもまた、文学においても行動においても、政治的でありイデオロギー的であることは、誰の眼にも明らかなことである。

かくして、階級対立の社会にあっては、政治の場がそうであるように、文学の世界もまさしく階級がするどく切り結ぶ血みどろの戦場以外の何ものでもないといわねばならない。

3

文学が、いかに階級斗争の戦場であるかの、ささやかではあるが、典型的な一例をドイツ文学史の中から紹介することにしよう。

ゲオルク・ヘルヴェーク Georg Herwegh (1817~1875)。きみはこの詩人の名前を知っているか？ ゲーテ、シラー、ハイネは、わが国でもよく知られている。シュトルム、シュテイフターもかなり知られている。クライスト、ノヴァーリス、ヘルダーリンを知っているかあるいは、名前を耳にしたことのある人も少くあるまい。しかし、それらの名前をすべて知っている人たちの中でさえ、いったいゲオルク・ヘルヴェークという名を知っている、あるいはきいたことのある人が、どれだけいるだろうか？ 彼は、わが国ではほとんど未知の詩人である。何故か？ 理由は簡単だ。紹介されたことがほとんどなかったからだ。ブルジョアイデオログの一翼を担ってきたブルジョア文学史家やゲルマニストたちによって、彼は、軽視、歪曲、内至は抹殺されてきたからである。

彼は、ハイネ、フライリヒラート、ヴェールトなどすぐれたドイツ三月革命期の詩人たちの列につらねらるべき詩人である。まさにだからこそ彼も、これらの詩人たちが受けたと同様の不当な扱いをうけてきたのである。

ちなみに「明治大正昭和翻訳文学目録」（国立国会図書館編，昭和34年発刊）を調べてもついに彼の名は見当らない。さらに，日本独文学会誌「ドイツ文学」にあたってみても，彼に関する論文は皆無であり，巻末の文献目録にも彼について書かれたものは，何ひとつない。「ドイツ文学辞典」（日本独文学会編，河出書房，昭和34年）には，ヘルヴェークの項がある。しかし，わずか200字にも足りぬきわめて通りいっぺんの解説がなされているにすぎぬ。入手しうるわが国で書かれ又は翻訳された文学史をみても，彼は完全に無視されているか，数行の簡単な紹介があるにすぎない。著名なドイツブルジョア文学史家フリッツ・マルティーニ＝Fritz Martini は，「1848年から1898年にいたるブルジョアリアリズムにおけるドイツ文学」の中で，900ページのうち，詩人としてのシュトルムに9ページを，フォンターネには13ページを，C. F. マイヤーには，実に22ページをさいているのに対し，ヘルヴェークについてはなんとわずか0.5ページが与えられているに過ぎない。(2)

ところが他方，ドイツ民主共和国においては対照的である。たとえば，パウル・ライマン Paul Reimann は，「1750年から1848年にいたるドイツ文学の主流」の中で，800ページのうち約10ページをさいて，ヘルヴェークについて詳述している。また，「ドイツ社会主義文学辞典」には，5ページ半の解説がなされている。ドイツ古典文学文庫の中には，ヘルヴェークの作品が，一卷に収められて出版されている。さらに何冊かのヘルヴェーク研究も書かれている。証拠の提示はこのぐらいにしておこう。これらの資料がしめすヘルヴェークの対照的な扱いは何を物語っているか？

ひとりの詩人の評価が，いかにきわだって政治的，イデオロギー的であるか。文学の評価が，いかにするどく階級斗争となっているか。これを確認するのに以上の証拠は十分すぎるであろう。

4

さて，ゲオルク・ヘルヴェークとはいかなる詩人であったか？ まず彼のもっとも有名で重要な詩のひとつを，そっくりここに紹介することにしよう。

お祈りをしろ　そして働らきゃいいんだ！　ひとさまはこう叫ぶ
お祈りは簡単にすませなよ！　時は金なりなんだからな
貧乏神が戸をたたく
お祈りは簡単にすませなよ！　時はパンなりなんだから
そこでお前さんは畑をたがやし　そしてお前さんは種をまく
そしてお前さんは鋤をうち　そしてお前さんはぬいものをする
そしてお前さんはハンマーをふるい　そしてお前さんは糸を紡ぐ――
さあ　そこでお前さんたちどうなんだい　手に入れたものはなんなのだ！

昼も夜もなく機械にへばりついて働らき
坑内にもぐって鉱石や石炭をほりつづけ
宝角たからづのにいっぱいいつめこむ
ぶどうや麦をこぼれるほどに

だがしかし　お前の食べ物はどこに用意されているんだ？
だがしかし　お前の晴れ着はどこにあるんだ？

だがしかし お前を暖めるストーブはどこにあるんだ？
だがしかし お前のよく切れる剣はどこにあるんだ？

一切合財ぜんぶお前の作ったものなんだ。／
どれもこれもぜんぶそうだ だのになにひとつお前のものじゃない。／
そしてその中でたったひとつだけ お前のものといえば
お前が鍛えて作った 鎖 それだけではないか？

肉体をぐるぐるまきにする 鎖
それは 精神の活動をやめさせる
それは 子供の足許ではやくも
ガチャガチャ音をたてている——なあお前さんたち これがお前さんのうける報酬なんだ。

お前さんたちが地中からほりだすもの
それは 悪い奴等の腹を太らせるための宝なのだ
お前さんたちが織っているものは 呪いだ
お前さんたち自身にとっての——それを錦の布におりこんでいるのだ

お前さんたちが建てる建物は お前さんたちのために
夜露をしのぐ屋根もなければ くつろげる居間もない
お前さんたちのおかげで着物を着 靴をはいてる奴らが
いばりくさってお前さんたちを踏みつけて歩いている

人間の働き蜂たちよ 自然はいったい
お前たちに蜜しか与えなかったのか？
お前さんたちのまわりで遊んでたらふく食っている奴らを見るがいい。／
お前さんたちはもう針をなくしちゃったのか？

働らく者よ 目をさますんだ。／
そしてお前がどんな力をもっているかを知るんだ。／
歯車という歯車はぜんぶとまっちまう
もしお前のたくましい腕がそうしようと思えば

お前をこき使うだんな衆どもはまっ青になっちまうぜ
もしお前が酷な仕事にうんざりして
鋤をばいと隅っこにほうりだして
「もうたくさんだ。／」と叫べばな

二重の轡^{くびき}をたたっ切るんだ。／
奴隷のくるしみをたちきれ。／
貧乏の奴隷であることをやめるんだ。／
パンが自由であり自由はパンなのだ。／(3)

これがヘルヴェークの詩である。

いったいわれわれの識っているドイツの詩人の誰がこんな詩を詠ったことがあるだろうか？

ここには、搾取されるものと搾取するものの関係が明快に詠いだされている。本来社会の主人でなければならない筈の労働者が奴隷とされている資本主義の決定的な病根が、ずばりと詠われている。さらに目を見張らせるのは、労働者のストライキへの決起をさえ呼びかけていることだ。

「プロレタリアートの歌い手」⁽⁴⁾とか「自由の戦士」⁽⁵⁾という呼称がヘルヴェークに与えられるのもむべなるかなである。

ハイネは、ヘルヴェークを「鉄のひばり」と呼んだ。ヘルヴェークは、まさに鉄のような頑強さで、死ぬまでプロレタリアートの立場で、人間解放と圧制者との斗かいの歌をひばりのように歌いつづけたのである。

5

1817年5月31日、ヘルヴェークは、シュトットガルトに生まれた。旅館の息子である。シェーネ Schoene によると、ヘルヴェークは、子供の頃は病弱で青白くやせっぽちだった。14才のときには神経性からの舞蹈病にかかったという。⁽⁶⁾

1835年(18才)、チュービンゲンのある福音教会の施設に入りそこで神学と法律を学んだ。2年後ヘルヴェークは宗教の世界の閉鎖性に耐えきれず、もはや祭壇には何の魅力もなくなった。彼は教会教師団と折合いがつかなくなり追放された。それは徴兵に直結した。しかし彼は、いったんは兵役に服することを拒否して処罰された。

1839年(22才)、ヴェルテンベルク王の陸軍憲兵たちとトラブルを起して、スイスへ逃げざるをえなくなった。

こんな若干のエピソードからも、いかに彼が自由を束縛するものに対して反抗的で、権威や権力に対しても臆することなくみずからの自由の声にしたがって行動したかをうかがいしることができよう。

当時のドイツは、1815年の例のウィーン会議によって、39の主権国家からなる「ドイツ連邦」の誕生をみていた。1830年、フランスではブルジョア自由主義の勝利をつげる七月革命が起り、その熱気はドイツにも吹きつけていた。「芸術時代」の終りを告げるゲーテの死は、1832年、ヘルヴェーク15才のことであった。そして時代は、理想主義文化時代、観念的空想時代から新らしい現実主義的近代文化、実践行動の時代へと移りつつあった。

いまや古典主義・ロマン主義の「芸術のための芸術」が排されて「人生のための芸術」が、主権をかくとくした。30年代と40年代前半は「若きドイツ派」Das junge Deutschland の時代であった。ドイツ連邦議会は、当然、好ましからざるものとして「若きドイツ派」のひとびとを弾圧した。そしてハイネ Heinrich Heine (1797~1856) は、その代表者とみなされていた。

ハイネは「新詩集」(1848年)の中で「傾向」という詩を詠っている。

ドイツの詩人ようたいたたえよ

ドイツの自由をきみの歌こそ

われらの心をとらえ動かし
マルセイエーズの調べさながら
われらを行為へかりたてよ

ロッテひとりに胸をもやした
ヴェルテルのようにもう嘆くな
合図の鐘がどうして鳴るか
それを民衆に告げねばならぬ
七首あいくちを語れ剣を語れ

もはや かよい笛をやめよ
牧歌のこころを棄てされ
祖国の大ラッパとなれ
加農砲となれ 臼砲となれ
吹け 鳴らせ とどろけ ころせ

吹け 鳴らせ とどろけ 日ごと
最後の圧制者が逃げうせるまで
ただその方向でのみ歌え
だがきみの詩はできるだけ
だれにも通じるようにせよ(7)

(井上正蔵氏訳)

またヴィーンバルクは、その著「美学征伐」の中で「著作は美しい精神の遊戯でもなく無邪気な娯楽でもなく、空想の気軽な仕事でもない。詩人も散文を書くものも、もはや以前とは異なって詩神に奉仕するのみでなく、祖国にも奉仕すべきであり、時代のあらゆる運動に対してその盟友とならねばならない」⁽⁸⁾ とのべている。

ヘルヴェークのそのはげしい天性の気性は、たちまちこのようなわきたつるつぼのような時代のパトスにとらえられずにはいなかった。1839年7月、スイスのトゥールガウにいったん難をのがれたヘルヴェークは、本格的な文筆活動を開始した。数多い雑誌や新聞のなかで中心になったのは「ドイツ民衆の声」紙 Deutsche Volkshalle であった。⁽⁹⁾ 1940年2月、彼はこんな一文を載せている。

「歓喜されようが歎かれようが、国民にとっての最善のきずなは政治的信仰である。主義と、定められた目標の一致である。国民はともに努力し、ともに不幸を分かちあうとき、よろこびもともにできる。」⁽¹⁰⁾

この頃のヘルヴェークについて、ライマンは次のように述べている。

「若い作家はどうしようもない不明確な点をいくつかもっているけれども、ヘルヴェークが、この雑誌（「ドイツ民衆の声」筆者注）に公表した評論や作品は、若きドイツ派の詩人たちの思想的限界をはるかにとびこえている。新らしい革命的文学批評の例証としては、若きエンゲルスの文学批評の論文と比肩しうるものである。ここではヘルヴェークは、きわめて明快に文学批評の新らしい見地を、即ち『真の批評は、まさに作品を大衆へ伝達する以外のなにものでもない』ということを表明している。ヘルヴェークの主要な関心は、新らしい文学とそれの民主的啓蒙にあった。」⁽¹¹⁾

6

1940年、ヘルヴェークはチューリヒへ転居し「文学社」Literatur Comptoir から、処女詩集「生者の詩」Die Gedichte eines Lebendigen を出版した。

この詩集こそ、まさに詩人ヘルヴェークの名を天下に高からしめたと同時に、熱狂的に受けとられた。

「情熱的で、響きにみちた詩句、なお漠然として混乱した概念の中にはあったが、自由の問題にたいする熱情が『最後のたたかい』『自由なことば』『檄』『自由に路を』そして『憎しみの歌』のような詩にみごとに結実した。その成果は、三月前期の時代には他のいかなる詩にも与えられていないものである。」⁽¹²⁾

「ヘルヴェークのドイツ文学の歴史にとっての功績と意義は、この戦斗的な詩集『生者の詩』と固く結びついている。この詩集は若々しい新鮮さと革命的熱狂によって、カール・マルクスが、彼自身マニフェストを書きあげる以前において、ドイツ文学の新しい革命的、デモクラシーの潮流の文学のマニフェストとしての影響力を持った。」⁽¹³⁾

「この詩集は40年代の文学運動を指導し、そしてこの詩集によってヘルヴェークは、革命的デモクラシーの詩人としての名声を得た。」⁽¹⁴⁾

たしかにこの詩集に表現されている絶対君主制の権力支配者に対する革命的憎しみの激烈さは、他のいかなる詩人も寄せつけぬものである。詩集全体がそれこそ反動的支配権力との非妥協的斗かいへの熱烈な「檄」となっている。たとえば、「にくしみの歌」は、次の様に詠われている。

さあいこうぜ 山を越え河を渡って
夜明けにむかっていくんだ
優しくしてくれた女に別れのキスだ
それから頼みの剣にも、
おれたちの手がばらばらにちぎれてなくなるまで
手を剣から離すんじゃないぞ、
おれたちは 長い間 いやになるほど愛してきた
だが もう憎まずにはいられない
愛は おれたちの力にはならない
愛は おれたちを救えることはできない
さあ 憎しみよ 最後の決断をつけるんだ
さあ 憎しみよ 自分の鎖りをほどくんだ、
暴君どもはまだいばりくさっている
奴らは恥しらずにもおれたちをひとつとらえさせている
おれたちは長い間いやになるほど愛してきた
だから もう憎まずにはいられない

まだ優しいハートを持っているものはこうしてくれ
ただ憎しみの中でだけハートがうつように
おれたちの怒りの炎をもえあがらせるために

かわいた木はそこらにごろごろしている
 自由の身でまだとどまっていることのできる者たちよ
 君たちは ドイツの街中にふれてくれ
 「みなさん、みなさんは長い間いやになるほど愛してきた
 だが もうにくむことを知れ。」と

奴らと休まず斗かうんだ
 この地上の暴君どもと
 そこでおれたちのにくしみはもっと神聖になる
 おれたちの愛がそうであったよりもっとはるかに。
 おれたちの手がばらばらにちぎれてなくなってしまうまで
 手を剣から離すんじゃないぞ、
 おれたちは 長い間 いやになるほど愛してきた
 だが もう憎まずにはいられない(15)

憎しみは何から生まれるか？ 愛することからだ。人間と自由を愛することが強ければ強いほど、また人間と自由を圧殺するものにたいする憎しみも、それに応じて強くなる。

人間にとってよりむずかしいのは、愛することよりむしろ憎むことではないだろうか？ われわれが悪を免罪したり執行ゆうよにしてしまうのは、われわれのもつ人間らしい優しさのためか？ いや、ちがう。憎むことが足りないからだ。つまり、ほんとうに愛することが足りないからではないか。

さらに「檄」の中の一節は次のようである。

地上から十字架をちぎりすてろ、
 だれもかれも剣となれ
 天にまします神さまもこれをお許し下さろう、
 歌作りなどやめろ、
 かなてこの上に剣をおけ、
 剣こそ救世主なのだ(16)

ここに詠われているものは何か？ 人民を支配する手段としてもっとも有効に支配者が利用してきたキリスト教や、支配者の御用をつとめる「非政治的」なロマン主義への、あからさな攻撃であり「祈り」や、ビーダーマイヤーの世界に逃避することをやめて、現実と面と向いあい、人間解放のためにたちあがることへのアピールなのである。

シェーネの研究によると、この詩集は2年の間に7版を重ねたという。(17)

スイスのゲーテ、ゴットフリート・ケラー Gottfried Keller (1819~1890)の若い魂を「ある朝突然起床ラッパのように」ゆり動かした「時代の声」とは、この詩集であった。

ブルノー・カイザーは「専制者たちの暴政にたいする怒りが頁毎にもえたぎり、ドイツの若者たちを行為へとかりたてる自由のファンファーレのように、封建的キリスト教的権力打倒へともえたさせた」(18) とのべており、エルマール・シェーネは「ドイツの歴史の中で、詩人が時代の斗争にヘルヴェークほど直接的に影響を及ぼし、彼の詩によって時代の政治運動にこれほど作用を与えたのは、ただこの一度だけであった」(19) と書いている。

さらにルカーチは「40年代に現存秩序のイデオロギー的批判が生まれた。それは文学的には、政治的叙情詩としてほとぼしりでた。——それはフライリヒラート（1810～1876）とヘルヴェークにおいて、今までドイツでは知られなかったような効果を発揮するにいたり、同時に注目すべき詩的高さに到達した。」⁽²⁰⁾と書いている。

7

1841年、ヘルヴェークはパリを訪れた。そしてそこでハイネと識った。ハイネが、ヘルヴェークを「鉄のひばり」と詠ったことはすでにのべたが、ハイネはなんと、ヘルヴェークの詩を五つも書いている。ハイネはヘルヴェークにたいして一定の批判をもってはいたが、この事実が2人の関係を推則させよう。またヘルヴェークとカール・マルクス Karl Marx（1818—1883）との出合は、1842年の秋、ラインラントにおいてである。

マルクスとの友情はその後、「ライン新聞」への弾圧から、マルクスがパリに移ったその年（1843年）の末、ヘルヴェークもまたパリに移り、その地で一層深まった。

そして1848年2月、パリに革命が起った。ヘルヴェークも他の多くの亡命ドイツ人たちとともに積極的に参加し、バリケードの上になつてたかた。革命の嵐はたちまちドイツにも波及した。しかし、ドイツではパリのように事態は進展しなかった。そこで急進的なパリ在住のドイツ人たちを中心に「ドイツ民主軍団」Die deutsche demokratische Legion が組織された。この軍団の目的は、ドイツに共和国をうちたてるため武装して革命を支援することであった。ヘルヴェークは「ぼくは嵐の前進をする。ぼくは共和国を投票により決定させたくはない。そうしないで、共和国を作るところみたい。たとえどんなにへんぴなドイツの片隅であろうとも」と、ヤコービ宛の手紙に書いている。この無暴な企てにたいしては、マルクス、エンゲルス、ヴェールトをはじめドイツ共産主義者同盟のひとびとは、気持は解るが愚かな企てだとそれをやめるよう忠告を与え、こぞって反対した。しかしそれは無駄であった。ヘルヴェークは、この軍団の団長をさえひきうけたのである。彼のこの行動には、マルクスよりも、1943年以来親交のあったロンヤの革命的無政府主義者バクーニン Mikhail Alexandrovich Bakunin（1814—1876）の感化が大きかったことが歴然としている。

ブルノー・カイザーの研究によれば、軍団の旗の下には当初2000名のパリのバリケード組が参集したという。その後700名にへりはしたがこの向う見ずの一隊は、1848年4月24日、ついにライン河を渡り、ドッセンバッハでヴェルテンベルクの軍隊と激突し、軍団はもろくも一瞬にして壊滅させられてしまった。自由なドイツ共和国を夢みてそれに命をかけた彼らは、その大半がとらえられた。しかしヘルヴェークと、ヘルヴェークと行動を共にしていた妻のエマ Emma は、百姓姿に身をかくして、命からがらスイスへ逃げのびることができた。⁽²¹⁾

この事件を契機にヘルヴェークとマルクスらとの友情ある連帯は、くずれざるをえなかった。

この事件は、プチブル急進主義に特徴的な、科学的社会主義への、つまり革命における階級斗争の動的な法則にたいする無理解が、ヘルヴェークに抜きがたくあったことを明らかにしている。

彼の熱した頭は、その行動がいかなる結果と政治的影響をもたらすか、もはや考えることができなかった。なるほどその大胆不敵な企ては、勇敢なことであったかもしれないが、結

局ドイツの反動政府を強化し、軍団のひとつとを無意味に軍隊の手中に引き渡し、ドイツに民主的な共和国をうちたてようと斗っていた勢力を分裂させることにならざるをえなかったのである。

ここにヘルヴェークのほとんど致命的ともいえる思想的な限界を指てきすることができる。

8

1849年、革命の挫折後ヘルヴェークは、スイスを転々とする。彼の交友関係は、当時ヨーロッパ各地からやってきた亡命者たちを中心に多彩であった。プルドンの共鳴者であったアレキサンダー・ヘルツェン、ラッサール、フォイエルバッハ、ケラー、ド・サンクティス、ペーター・フェルバー、リヒャルト・ヴァグナー、ゴットフリート・ゼムパー、その他イタリーからの亡命者の一群など。そして「鉄のひばり」のさえずりは、いぜんとしておとろえることがなかった。

1869年には第1インターナショナルの各営通信員となり、またドイツ社会民主主義の新聞、ベーベルやリープクネヒトが編集発行していた「人民の国」 Volksstaat のレギュラーの寄稿者としても働いた。

また「全ドイツ労働者同盟」 Allgemeine Deutsche Arbeiterverein に参加し、前掲の「同盟歌」(1863年)を作った。

ヘルヴェークが、3月革命25周年を記念して作った詩「3月18日」 Achtzehnter März (1873年3月作)の最初と最後の節は、次のように詠われている。

1848年

春がきてかたい氷がめりめりと割れたのは
二月の日々と三月の日々のことであった
何よりも希望にふくらんで目をさましたのは
それはプロレタリアの心ではなかったか？

1848年

1873年

金持ちたちの帝国がそこにたっている。けっこうなことだ、
だがおれたち貧乏人は売りとばされ裏切られて
プロレタリアのやったことを想い出す——
三月は過ぎさったが何回でもめぐってくるのだ
1873年 (22)

先に引用した「同盟歌」や、死の2年前に作られたこの詩を読めば、なるほどマルクスや、エンゲルスの同伴者ではなかったけれど、ヘルヴェークのプロレタリアート解放への闘う意志は少しも変更されてはいないことが判る。

「ヘルヴェークは、彼の基本姿勢では彼の死にいたるまで、革命的詩人でありつづけた。とりわけ彼は晩年においてそれを証している。晩年に、彼は長い迷いのあとで、ふたたび労働運動に近づきドイツ帝国創成期にビスマルクの反動的政治を攻撃した唯一の重要なドイツ詩人となった。ヘルヴェークが、ビスマルクによって建設された『金持ちたちの帝国』に新

らしい三月を告知した詩は、彼の文学の軌跡の価値ある結着であった。」⁽²³⁾ と、パウル・ライマンは書いている。

また、ヘルヴェークについてのドイツ民主共和国における一般的評価はいかなるものか。「ドイツ社会主義文学辞典」からその部分を引用しておく。

「斗かうプロレタリアートに捧げられた詩の中では——初期の“自由”を詠った詩とは逆に——もはや“労働者のプラトニックな友”(マルクス)ではなく——プロレタリア階級の中に世界変革の力を認識した詩人が現われている。それはたとえば『同盟歌』の中でのように。——

社会の不正にたいする、そしてプロシヤドイツミリタリズムにたいする妥協なき斗かいにおけるヘルヴェークの功績は、自由と労働者階級解放の詩人としてドイツ文学における彼のきわだった位置を確固たるものとしている。」⁽²⁴⁾

注

- (1) Thomas Mann: Künstler und Gesellschaft. Altes und Neues. S. Ficher Verlag 1953 S.438
- (2) Fritz Martini: Deutsche Literatur im Bürgerlichen Realismus 1848-1898.
J.B.Metzlersche Verlagsbuchhandlung. 1962.
- (3) Herweghs Werke in einem Band. Aufbau-Verlag 1967. S. 65.
- (4) Wolfgang Büttner: Georg Herwegh, ein Sänger des Proletariats. Akademie Verlag.
Berlin 1970.
- (5) Elmar Schoene: Georg Herwegh, Kämpfer für die Freiheit. Verlag Nürnberg Presse
Gm bH. 1949.
- (6) Elmar Schoene : a.a.O. S.9.
- (7) 世界名詩集大成7:平凡社版. 昭和33年. p.325.
- (8) 日本独文学会編「ドイツ文学辞典」若きドイツ派の項参照.
- (9) その外カールグッコウ編集の「ドイツテレグラフ」紙や、アウグスト・レヴァルト編集の「ヨーロッパ」紙など.
- (10) 「ドイツ民衆の声」Deutsche Volkshalle 紙の49, 51, 53, 55号, 1940年2月4, 6, 8, 11日
付で「作家会議」についての論文の中から.
- (11) Paul Reimann: Hauptströmungen der deutschen Literatur 1750-1848. Beiträge zu ihrer
Geschichte und Kritik. Dietz Verlag. Berlin 1963. S.722.
- (12) Lexikon sozialistischer deutscher Literatur. VEB Bibliographisches Institut. Leipzig
1964. S.219.
- (13) P. Reimann. a.a.O. S.721.
- (14) P. Reimann. a.a.O. S.722.
- (15) 「Das Lied vom Hasse」Herweghs Werke.S.42.
- (16) 「Aufruf」a.a.O. S. 53.
- (17) Elmar Schone: a.a.O. S.19.
- (18) Bruno Keiser: Georg Herwegh. Der Freiheit eine Gasse. Verlag Volk und Welt. Berlin
1948. S.11.
- (19) Elmar Schone: a.a.O. S.20.

- (20) ルカーチ「ドイツ文学小史」, 岩波書店, 93ページ, 道家, 小場瀬訳.
- (21) Bruno Keiser: a. a. O. S. 42~45.
- (22) Herweghs Werke: a. a. O. S. 283~284.
- (23) Paul Reimann: a. a. O. S. 725.
- (24) Lexikon: S. 221.

参 考 文 献

注にあげた以外のもの

- Georg Herwegh: Gedichte und Aufsätze. Verlag Philipp Reclam. Jun, Leipzig.
- Georg Herwegh: Über Literatur und Gesellschaft. Akademie-Verlag. 1971. Bearbeitet und eingeleitet von Agnes Ziegengeist.
- マルクス・エンゲルス文学, 芸術論, 大月書店, 1954.